

スラヴ社会における婚姻儀礼の用語

~民族言語学的な視点からの予備的考察~

**Terms Related to the Marriage Ceremony in Slavic Society:
A preliminary study from the perspective of Ethno-linguistics**

佐藤 規祥

Noriyoshi SATO

Abstract

In this paper, I propose a preliminary approach to the understanding of terms related to the traditional Slavic marriage ceremony from an etymological point of view. The marriage ceremony in traditional Slavic society is assumed to reflect the patriarchal institutions, which have been inherited from antiquity by the Indo-European societies. Nevertheless, most words used to describe substantial concepts in the marriage ceremony in Slavic are not cognates with other Indo-European languages. In fact, in Slavic languages, the words meaning “bride,” “wedding” and “matchmaker” were formed much later, although the concepts can be traced back to ancient times.

My view is that in Slavic and other Indo-European languages, the meanings of a number of words which formerly described important attributes in the traditional marriage ceremony have changed and consequently, identification of inherited terms is obscured.

1. スラヴ文化における婚姻儀礼の来源

スラヴ諸民族においては年代記などの書記記録が現れて以来、婚姻儀礼についての記述が断片的ではあるがいくつも残されている。それはキリスト教的な教義とは相容れない性格のものであり、明らかに太古から伝わってきた異教の儀礼であった。キリスト教が広く定着した今日に至ってもなお、民族的な儀礼に伴なう風習の多くは次第に衰え、廃れる傾向にあるとはいえ、根強く生き続けている。これについては民族学的ならびに言語学的な研究において、かなり早くから繰り返論じられてきた(Niederle 1911, シュラーダー 1977, Kozačenko 1957)。とくに民族学的な視点から個々のスラヴ系諸民族の婚姻儀礼について記述した研究は、何よりも多様性に富んだ地方ごとの実態を詳細に記録することに重点が置

かれやすい。実際、同じ民族内であっても、調査地点が異なれば別様の儀礼、風習が観察されるのがふつうである。実際、同一のものが別々の名称で表されることもあれば、同一の行為が異なる形態で表現されることがある。最近では、ロシアにおける結婚儀礼について伊賀上氏が文化人類学的な観点から記述したが、その考察対象と調査地域はかなり狭いにもかかわらず、本質的で共通した要素が何であるかを探るのは容易ではないことが分かる(伊賀上 2013)。

このように多様性に富んだ婚姻儀礼のうち、スラヴ文化において特徴的な最古層の共通の要素が何であるかを求めることは極めて難しい。少なくとも民族学の部門においては比較言語学的とは異なり、何らかの方法論的手続きによって、過去に行われていたと想定される儀礼を「再建」というような議論は行われたい。そのため、もし原スラヴ人の中で継承されてきた婚姻儀礼の諸相について、たとえ理論的にせよ想定する可能性が残されているとすれば、それは専ら比較言語学的手法に基づき、その儀礼に直接的に関連付けられる語彙を比較、対応した上で再建するという方法以外にないと思われる。もちろん言うまでもなく、そこから知り得ることは儀礼について言語学的に説明可能な側面に限られるので、儀礼行為において本質的な空間的、時間的プロセスを追って再現することなど全く不可能である。それゆえに、言語学的に明らかにし得ることは、婚姻儀礼に直接的に、または間接的に関連する個々の事実や、それに伴う必需品などを表す語彙を祖語に想定することにすぎない。

2. 婚姻様式の発達段階

言語学的な貢献は確かに不完全であるかもしれないが、はるか遠い過去のスラヴ社会における伝統的な婚姻儀礼の一面を知るには、言語比較の方法がただ一つの手段であることに変わりはない。実際、スラヴ諸語と他のインド・ヨーロッパ諸語間の比較の方法に基づく、そこに共通する古くからの風習を表現する語彙が見られる。その代表的な例として、シュラーダーやバンヴェニストが挙げた語彙対応がある(シュラーダー 1977, p.88, バンヴェニスト 1986, p.232)。それらによると、花嫁が結婚することを表現するのに、花嫁を親の家から夫あるいはその両親の住まいにおごそかに「連れてくる」という動詞かまたはその派生語の名詞が用いられるということである。すなわち、古ロシア語 *voditi* 「導く」、*vodimaja* 「配偶者」に対して、ラトヴィア語 *vedama* 「花嫁」、古代インド語 *vadhuh* 「花嫁」などである。しかし、ロシア語においては引用例の動詞がとくに結婚と結び付けられるわけではなく、極めて一般的に用いられる。

トゥルバチョフの指摘した次の例については、上記の例ほどに広く分布していないが、ロシア語などのスラヴ諸語以外にギリシャ語、ラテン語、ゲルマン語において平行した古い風習である売買婚に関係つけられる語が現れる(Trubačev 1975, p.7; 風間 1987, p.224)。なお、以下でスラヴ祖語の語形には慣用に従い、理論的に想定されたことを示す *印を記す。

1. ロシア語 *veno* 「花嫁の結納、持参品」 (< スラヴ祖語 *vedno)

古ロシア語 *dat' veno* 「持参金を渡す」

ラテン語 *vēnum* 「売り物」 (< *vednum*), *vēnum dare* 「売り物にする、売りに出す」

ギリシア語 *hednon* 「持参品」

古期高地ドイツ語 *widamo* 「花嫁の代償としての贈り物」(ドイツ語 *Wittum* 「結婚に際し夫から妻に与えられる財産」), 古英語 *weotuma* 「花嫁を手に入れる持参金」

上記の対応例は、語形面では同一の起源に発する語であると認めることができる。けれども、語義が厳密には一致していない。つまり、持参品を持たせるかまたは贈り物を差し出す人物が、花嫁の父か花婿なのかが特定できない。ただ共通するのは、受け取るのが花嫁であること、しかも生涯その財産は妻のものであり、妻が亡くなればその子に受け継がれることである。

東スラヴ人社会において9世紀頃、売買婚が行われていたことは、『原初年代記』の記録から知ることができる(Kozačenko 1957, p.58; Niederle 1911, p.69-70; 伊賀上 2013 p.38)。これよりも早く古代ローマ社会においても売買婚の記録が認められるが、その制度を単純にスラヴ社会のそれと比較するのは難しい。古代ローマにおいてはいくつかの婚姻の形態が法的にも認められていたが、身分によっても異なっていたのである。

そのうちの一つに「売買式婚姻 (*cōemptiō*)」という行為がある。これは少なくとも当時の法的な規定によると、女性を売買するという意味での売買婚とは関係がなさそうである(ベーレンツ 2001, p.145)。ただし、その語形自体は明らかに古く、動詞 *cōemō* 「買い集める」から形成された名詞である。さらに、この語は接頭辞の違いを除けば、ロシア語 *prijatie* 「取り上げること」(< **pri-ętsje*)に対応する。もし、これら双方の語の起源が同じであるとすれば、やはり売買婚の一端を示す事例であるかもしれない。また、上記の *veno* など持参品を表す語に対比して用いられたことも考えられよう。遠い過去における社会の変化、発達が語義の変化をもたらし、その本来の語義を不確かにしてしまったと言える。

一部の東スラヴ諸族の間においては売買婚だけでなく、より古い風習である掠奪婚が行われていたことが確認されている(Niederle 1911, p.70-72; 伊賀上 2013, p.38)。これは先の『原初年代記』の記述に基づくものであり、その実態は定かではない。すなわち、全くの強引な掠奪によるものなのか、あるいは合意の上で形式的に掠奪行為を演じていたのか、さらにそれが部族ごとに異なっていたのか、歴史書の文面からは知る手掛かりが得られないのである。ニーデルレは、歴史時代のウクライナ、ベラルーシ、チェコにおいて花嫁を自宅に閉じ込めるという風習は掠奪婚の名残であると考え、それが専ら象徴的に形態を変えた儀礼として受け継がれていると論じた(Niederle 1911, p.73)。

掠奪婚の様式はスラヴ社会だけでなく、他にも古代ギリシアやアイルランドなどにおい

でも女性側の同意なしに行われることがあったらしい(風間 1987, p.226; シュラーダー 1977, p.87)。ただし、このように平行して古い掠奪婚の風習またはその名残が、スラヴ社会の内外において観察されるにもかかわらず、それらの中には掠奪婚を意味する共通の語彙表現が見つからない。すなわち、それはもはや社会で認識された正式な婚姻の制度の一つではなく、まさに他人の財産に対するのと同様に、女性を掠奪したのと同然のこととして考えられていたのであろう。これは、売買婚における「持参品」を表す語彙がスラヴ諸語内と他の語派との間で共通しているのに対して、歴然とした違いを表している。

ところで奇妙なことに、スラヴ諸語と他の一部のインド・ヨーロッパ諸語との間において、ある程度は婚姻様式や儀礼内容に共通性があるにもかかわらず、それを反映しえる語彙の実例がこれまでに指摘されることは実に少なかった。この事実は決して、スラヴ社会に継承された伝統的な婚姻儀礼がインド・ヨーロッパ的な特徴を示さない、ということの意味しているのではなかろう。似通った平行する風習が広く確認されるとしても、何故かそれを示す語彙表現がそれぞれに異なっているのである。それはどのように説明されるのか、このあと考えてみたい。

3. 語彙表現の発達

言語学的な視点からは、婚姻儀礼に関するインド・ヨーロッパ語的な語彙面での共通性が多く認められないのは、その事実にあるのではなく、検討の対象またはその着目点に理由があるのかもしれない。その理由の一つは、婚姻儀礼において欠かせない直接的に関連する表現、とりわけその制度にのみ検討対象の焦点を当てたことであると思われる。つまり、スラヴ諸語において例えば「結婚」「結婚式」「花嫁」「花婿」などを表す語彙の語源を対象にすることである。これらの概念は単に社会の制度として、結婚式が行われたという事実を証しているけれども、それが具体的にどのような儀礼的なしきたりと経緯をたどり行われるのかについては、何も示さない。

また、それらの語はスラヴ語において、比較的遅い時代に独自に発達した代表例ともいえ、そのためか他の語派に対応する同源語が見当たらない。以下にロシア語の語形と語義を例に挙げ、その元になるスラヴ祖語の語形を続けて示す。

2. brak 「結婚」 (< スラヴ祖語 *bъракъ: 動詞 *bъrati 「取る」から形成された名詞)
3. svad'ba 「結婚式」 (< スラヴ祖語 *svadьba)
4. nevesta 「花嫁」 (< スラヴ祖語 *nevěsta: 動詞 *vedeti 「知る」から形成された名詞)
5. ženix 「花婿」 (< スラヴ祖語 *ženixъ: 名詞 *žena 「妻」から形成された名詞)

上の 2. brak は、家父長制度的な男性側から見た表現であり、花婿の家族が娘を嫁として「取る」または「連れてくる」ことを意味する。また、3. svad'ba はしばしば誤って動詞 svoditi

「連れていく」と関係付けて、民間語源により説明されることがある。しかし、むしろ後の 7. *svat* 「媒酌人」の語基と関係付けて説明すべきかもしれない。

結婚するという行為を女性が主体となり、自らの意志で結婚することを表現する語はない。現代ロシア語でも女性を主語にする場合は、*vyjti za muž* 「夫のもとへ出ていく」という意味で表現するしかない。そして、男性が主体となる表現の *ženit'sja* 「結婚する」もまた、名詞 *žena* 「妻」から比較的新しく形成された「妻をとる」を意味する動詞である。したがって、男女ともに主体となって「結婚する」という表現は用いなかったのである。この言語表現上の事実は実情をよく示している。というのは、本来は双方の両親へ縁談を取次いで、婚約を取り計らうのは媒酌人であり、結婚する本人達は少なくとも儀礼上は何もしないからである。

このため、古ロシア語では媒酌人などが主体となり、嫁や婿を「婚約させる、縁談を持ち掛ける」という非常に古風な以下の表現が用いられてきた。さらに、これはちょうど前例 1. の *veno* 「持参品」と同様に、ラテン語に対応する同源語が見つかる。

6. *snubit'* 「(嫁か婿を)婚約させる」 (< スラヴ祖語 **snubiti*)
ラテン語 *nūbō, -ere* 「嫁に行く」

実際には、上のラテン語の動詞 *nūbō* もまた、花嫁自身が一人称主語に立つ語形では使用されない。その代わりに分詞形 *nūptum* 「結婚した」が多用され、その女性形 *nūpta* は「花嫁」を意味する。また、ラテン語で「結婚」を意味する表現には、この動詞の語基に接頭辞の付加された名詞 *cōnūbium* が用いられる。

スラヴ諸語とラテン語との間をつなぐ、婚姻儀礼に関する用語例としては、例 1. *veno* と 6. *snubit'* が知られている。これらはいずれも婚約に関する語彙であるが、この他の事例はこれまで特に指摘されて来なかった。そのため、このような同源語の共有は単に偶然、古風な表現を保持したに過ぎないようにも思われる。ところが、どちらの語彙も同じ婚姻制度の一端を示唆し、語形が一致していることから、それぞれが個別に発達したとも考えにくい。したがって、もし同様の語彙例がまだあるとしても、これまでのところ、あえて婚姻儀礼に関連付けられた説明がなされなかったと考えることができる。以下ではそのような状況も視野に入れて、古くからのスラヴ的な婚姻儀礼を反映する語彙の発達を検討したい。

本章ですでに論じたように「結婚(する)」や「花婿」「花嫁」を意味する語彙表現は比較的遅く独自に発達したという事実は、必ずしもスラヴ語派に限ったことではなく、他のインド・ヨーロッパ諸語においても見られることは、バンヴェニストが「婚姻」を意味する用語が存在しないことを示す例で指摘している通りである(バンヴェニスト 1986, p.231)。これについての詳しい説明は、彼の著書で明らかにされている通りであるので、ここでは

繰り返し述べない。次章では、地域的にも年代的にも、もう少し限定された範囲内でスラヴ語派とその他の言語との間において、密接な関係を反映するような事例に焦点を当て、検討したい。

4. より古い語彙の対応

前章では確かに、スラヴ諸語においては「結婚」「花婿」「花嫁」などの婚姻儀礼の主たる語彙表現がいずれも、スラヴ語内で独自に発達したと述べた。それでは、果たしてスラヴ社会に継承される婚姻儀礼についての語彙表現が全般的に、年代的に比較的新しく独自に発達したのかということ、必ずしもそれには当たらないようである。実際、以下の例に示すようにロシア語に見られる若干の重要な語については、バルト語派のリトアニア語に対応する同源語が見つかる。

7. *posag* 「持参品, 結婚」, *sagat'* 「嫁に行く」 (< スラヴ祖語 **posagъ* **sagati*)
リトアニア語 *sagas* 「留め金」, *segti* 「留め金で留める」.
8. *svat* 「男性の媒酌人」, *svaxa* 「女性の媒酌人」 (< スラヴ祖語 **svatъ* **svaxa*)
リトアニア語 *svetis* 「客」, ギリシア語 *etēs* 「友人」
9. *venec* 「花輪」 (< スラヴ祖語 **věньць*: 動詞 **viti* 「巻きつける」から形成された名詞)
リトアニア語 *vainikas*.

これらのうち、7の *posag* は動詞から二次的に形成された名詞であり、対応するリトアニア語の動詞の語義から考えて、動詞 *sagat'* の語義も婚姻とは関係ない語義が変化した結果と思われる。次の8もまた、スラヴ語派において語義のみが独自に発達した可能性が高い。唯一、9の「花輪」のみが語形と語義が完全に一致している。

この「花輪」は、花嫁のお下げ髪とあわせて乙女時代の象徴とされ、婚姻儀礼では最も広まっている。これは輪の形をした指輪や丸型パンと同じく、結婚の象徴ともみなされている。スラヴ諸民族の間では、ある年齢に達した娘が結婚するまで頭に被るものである。また、結婚式の前夜に編むことが最も多らしい。結婚式においては花嫁と花婿、ときには式に出席する関係者ですら花輪を被ることがあるという報告もある(Tolstoj (ed.) I, 1995, pp.321-322)。この意味において、この語は疑いなく婚姻儀礼に関係付けられると言える。ただし、風習自体はキリスト教の影響によって広まった、という可能性も完全には否定できない。

他方で、古代ローマにおいては結婚式当日になると、花嫁宅の扉と戸の柱が常緑樹の枝や花、色つきのリボンで編んだ花輪で飾り立てられた(Paoli 1963, p.116)。ここでも花輪はその利用の仕方こそスラヴ文化とは異なるけれども、婚姻儀礼においては欠かせない役割

を担う象徴の一つであったことが分かる。しかし、ラテン語で「花輪」を表わす語 *corōna* はスラヴ諸語のそれと全く関連がないだけでなく、他に対応する語すら見られない。

ところで、スラヴ諸語はバルト語派との関係だけでなく、シュラーダーが示したように、さらにゲルマン諸語にも以下のような同源の対応語が現れる。

10. *družka* 「花婿の付添人」 (< スラヴ祖語 **družьka*)

リトアニア語 *draugas* 「道連れ」

アングロサクソン語 *dryhtguma* 「戦士, 花嫁介添人」, 古期高地ドイツ語 *truht* 「戦士隊, 従者」.

この対応から分かることは、どうやらかつてスラヴ人やゲルマン人の間では、婚礼の行列を取り囲む花婿の友人や花嫁の付添人らが武装し、行列の進行を妨害する者から護衛する役割を果たしていたらしい、ということである(シュラーダー 1977, p.90)。その意味において、このような風習は相当古い掠奪婚の名残に関係付けて説明することもできよう。ロシア語の *družka* という語形自体は、**drugъ* 「友人」の語基に二次的な接尾辞を付加して形成された名詞である。他方で、別の接尾辞をもつ名詞 *družina* は古代ロシアで「親兵」を意味した。これらの派生語の語義に **drugъ* のもとの語義が保持されていると仮定すれば、ゲルマン語の対応例を考慮に入れて、その語義はむしろ「花婿の付添人」かまたは「従士」に求められよう。

スラヴ社会においては、付添人は花婿宅から婚礼行列を率いて進み、花婿とともに花嫁を迎えに行く。そのあと、花嫁を連れ、教会を経たのち、花嫁を花婿宅へ導く役割を果たす。ロシアにおいては、その道中で婚礼行列が様々な儀礼的な通行妨害に遭遇することがあり、また、呪いや邪視を受けやすい(伊賀上 2013, pp.120-127)。さらに、付添人は披露宴においても進行役を務めるなど、その役割は大変大きい。

婚礼行列と密接に関係するのが婚礼旗である。南スラヴ、スロヴァキア、ウクライナ西部の諸民族の間では、花嫁のところへ向かう婚礼行列の先頭は、ふつう婚礼旗を掲げる旗持ちが歩いた。ロシア北方では、婚礼よりも前に、娘への求婚が成立した時に花婿の村から賛辞を表して赤い布きれのついた竿を立てられる。また、婚礼の当日には、地域にもよるが様々な形で婚礼旗をめぐる買い取り儀礼に利用される(Tolstoj (ed.) II, 1995, pp.344-347)。

これに似た様な風習はゲルマン人の間でも見られたらしい。アングロサクソン語では花嫁介添人の先頭の者たちを *tácn-bora* 「旗もち」と呼ぶ(シュラーダー 1977, p.90)。けれども、スラヴ諸語において「旗」を意味する語は、以下の通りゲルマン諸語ではなく、ラテン語、ギリシア語に対応する。

11. *znamja* 「旗」 (< スラヴ祖語 **zname*: 動詞 **znati* 「知る」 から形成された名詞)
 ラテン語 *cōgnōmen* 「家名」
 ギリシア語 *gnōma* 「特徴」

上記の対応例について、ラテン語の例が二次的な接頭辞が付加された派生語である意外には、語形の完全な一致を見るが、それぞれのもとの語義を特定するのは難しい。スラヴ諸語には「旗」を意味する別の古い名詞、例えばチェコ語の *prapor* (< **porpor-*) も知られることから、ロシア語の *znamja* は別の語義をかつて表していた疑いが強い。

他方で、ラテン語において「旗」を意味する語は *vexillum* である。これは明らかに、動詞 *veho* 「運ぶ」の語基に接尾辞 *-slo* が付加されて派生した名詞 *vēlum* (< **vekslo*) を基にして、そこからさらに、指小辞を付加して形成された語形であることが分かる。その名詞 *vēlum* は次のロシア語の *veslo* 「(船をこぐ)かい」に、どちらも連続する子音の脱落という音変化を経ているが、厳密に対応する。

12. *veslo* 「かい」 (< スラヴ祖語 **ve(z)slo*: 動詞 **vezti* から形成された名詞)
 ラテン語 *vēlum* 「帆、生地、布」

一方のロシア語において「かい」を意味し、他方のラテン語において「帆、布」を意味する同一起源の語は、原義の想定が容易ではない。このような対応は婚礼行列に関連する語義を想定することによって初めて、その原義の解明につながる可能性が見えてくる。動詞の語義が「運ぶ」であることを考慮にいれるならば、かいに代わり船を押し進める「さお」を意味したと想定され、これは同時に使い道が異なる「旗棹」として解釈することもできる。ラテン語ではその旗棹が旗の「布」自体を意味するようになったのではないか。もしも、花嫁を花婿の新居へ運ぶという行為を、あたかも船で運ぶかのように象徴的に意味する道具であったとすれば興味深い。

以上のことから、スラヴ社会においては、旗が婚礼行列とつながり深いことは明らかであるように、旗をかつて意味していたと想定される語は、古来の婚姻儀礼の行われ方を知ろうえで重要な手掛かりになるに違いない。

このように、仮に婚姻儀礼に深く関連する語彙表現であったとしても、互いに対応関係にある同源の語の語義がともに大きく変化してしまった結果、表面的には全く無関係な語彙になってしまうことも稀ではない。実際に、こういった多くの事例が、古来の婚姻儀礼における細部の「行われ方」を不明瞭にしている原因の一つであるのかもしれない。

5. 言語学的な視点からの検討対象

よく知られているように、スラヴ語派とバルト語派の間にはかなり多くの共通した語彙

が観察されるため、両者が言語的に最も密接な関係にあることは疑いの余地もない。それにもかかわらず、上記のように婚姻の制度に関連しえる共通語彙は、とくに多いとまでは言えない。それには何か別の原因があるからに違いない。

その原因として考えられることは、検討対象としてしばしば婚姻制度に関連付けられる語に焦点が当てられる反面、婚姻儀礼とは無関係に日常的に用いられる語には着目されてこなかったということが指摘される。すなわち、儀礼が執り行われる最中はとくに象徴的な意味を表すが、儀礼が行われない場面においては何ら特別な意味を表さない概念には、少なくとも言語学的な視点からは十分な関心が払われてこなかったと言える。他方で、当然ながらそのような概念の象徴性について、民族学的な視点からは詳細に記述されている(Tolstoj (ed.) I-II, 1995)。実際に、民族学的な視点からは特別な意味をもつ概念が、必ずしも言語学的にも同等の価値をもつとは限らない。

例えば、ロシアなどにおいて婚礼用に焼かれるパンであるカラヴァイ(karavaj「大型丸パン」)は、結婚式に欠かせないものであるが、地方によってはその種類、形態は多様であるため、それに替わる名称もまた数多くあることが知られる。ロシアの民族学者グラは北部ロシア地方において観察される、そのような婚礼用パンについての詳細な方言語彙録を記述した(Gura 1977)。けれども、それらの方言語彙のうち karavaj, kolobka, kalač などいずれも「丸型のパン」という共通項によって特徴づけられる数例を除けば、とくに語源学的に注目すべき資料にはなりえない。そこで重要なのは、その婚礼用パンの名称や語義そのものではなく、その機能または象徴性にあると言えよう。

そこで、民族学的な観察から明らかにされている、婚姻儀礼において表出される何らかの象徴性や、そこで果たされる機能に焦点を当てるならば、これまで言語学的に関心の薄かった語彙が婚姻儀礼の用語として認識されるに違いない。これは、スラヴ諸語において儀礼の場面でのみ、用語として機能していたと想定される語彙を検討対象にすることであり、それと同源の対応語を他のインド・ヨーロッパ諸語に見つけ出すことを意味する。こうして、婚姻儀礼の用語を互いに共有する言語との文化的な潜在的関係性が説明されるはずである。そのような試みによって、スラヴ社会において婚姻儀礼が発達した文化的背景の一面を解明することができるかもしれない。

本論においてはこのあと、スラヴ文化における婚姻儀礼の用語として認められるいくつかの語彙を取り上げ、それらを語源学的な視点から可能な説明を試みたい。

6. 婚姻儀礼の潜在的用語

婚姻儀礼において欠かせず直接的に関連する主要な概念は、婚姻儀礼の基本用語と見なされる。これに対して、儀礼と結び付けられることで象徴的な意味を潜在的に表すけれども、通常はそれとは無関係に用いられる概念は、婚姻儀礼の潜在的用語とすることができ。ただし、両者は厳密に区別できるものではなく、その区別そのものが意味をもつので

はない。

婚姻儀礼そのものをどのように規定するかによっても、その用語の範疇は変わりえる。ここでは言語学的な検討の対象として大枠で定めたい。したがって、結婚式と披露宴だけに留まらず、それ以前の婚約に関連する行為から、式後の新生活の始まりに至るまでに生じる行為全般が含まれる。

先の潜在的用語は言語によって同じ象徴性を表す場合と、そうではない場合とが考えられる。また他方で、同じ象徴性を表す複数の言語でも、それぞれ異なる語によって表現されることもあり得る。したがって、互いに同じ象徴性を表現する別々の言語間において、同一の語または同源語が用いられる事例が確認されれば、注目に値するであろう。何故ならば、そのような事例は、単なる偶然の結果で生じたという疑いが残るにしても、どちらかという、それらの言語間において互いに共通した儀礼行為が継承されていたために、同一の語彙表現が用いられたという説明ができるからである。

7. 実例の検討

ここではとくに潜在的用語にはどのような語彙が関係しえるかに焦点を当てたい。実際、婚姻儀礼とはさほど関連性もなさそうな語彙ですら、語源的な視点からは重要性を示すことが少なくないからである。その根拠として、これから論じる二点を指摘することができる。

まず、その一つは語義が変化したり、別の語彙に置き換わることによって、検討対象から排除されたことが想定される。例えば、指輪は婚約の証しとして花婿が花嫁に贈る、もしくは相互に交換される(Tolstoj (ed.) II 1995, p.563)。この指輪を表す語はロシア語で *kol'co* である。これは間違いなく、*kolo* 「車輪」から形成された比較的新しい語と思われる。これとは別に、スラヴ諸語に広く用いられている語はロシア語で *persten'* 「指輪」である。これもまた *perst* 「指」から形成された派生名詞であり、スラヴ語派において発達した固有の語である。それゆえに、より古い年代に遡って、指輪を指した表現は全く別の語である可能性が否定できない。

そこで、「円、輪」を意味する *krug* がアングロサクソン語 *hring* 「指輪」に対応することから、これが本来の指輪を意味した語であったと想定できそうである。さらに以下の通り、この語はラテン語と同じイタリアック語派の一つである、ウンブリア語の *cringatro* にも対応する。

13. *krug* 「輪、円」(< スラヴ祖語 **krǫgъ*)

ウンブリア語 *cringatro* 「肩の締め帯」

他方で、ラテン語では起源不明の *ānus* 「輪」から二次的に接尾辞を付加して形成され

た *ānulus* が「指輪」を意味する。このことから、もともと指輪を意味していた語彙はラテン語では失われてしまったが、近い関係にあるウンブリア語では語義の変化を遂げて、保持されたと考えられる。そこで、ともに語義の変化したスラヴ諸語とウンブリア語との間に、かつて指輪を意味したと想定される語のつながりを認めることができる。

古代ローマ時代においても上流階級の間では婚約に際し、花婿が花嫁に鉄製か金製の婚約指輪(*anulus pronubus*)を贈る風習があった(ヴェーバー 2011, p.218)。このような風習がいつのころから始まったのかは不明である。しかしながら、古代ローマ社会とスラヴ社会に平行して観察される婚約指輪の風習は、全く無関係とは言い難いと思われる。それが古代ローマ時代以後にスラヴ社会に伝播したのであると仮定すれば、指輪を意味する語はラテン語の *ānulus* が借用されたかもしれない。けれども、古代ローマ時代よりもはるか以前の年代において、スラヴ社会との文化接触を通じて生じた風習であったと仮定するなら、いずれにも共通する語彙で表わされた可能性がある。それがロシア語の *krug*に通じ、ウンブリア語に保持された *cringatro* であったのではなからうか。このような事例は語彙変化においては決して例外的なことではない。

民族学においては、「指輪」は先に触れた *venec*「花輪」や *karavaj* などの婚礼用の「丸型パン」と同様に、婚姻儀礼における円形や丸いものとして象徴的な意味を持つと考えられている(Tolstoj (ed.) I 1995, p.247)。

次に婚姻儀礼の潜在的用語として提示すべき検討対象は、議論の余地が残されている。それは民族学的な調査に基づく実態からは知りえないような、儀礼行為に関係付けられる。民族学的な調査は、その大部分が比較的新しい時代に実地において収集された事実であり、遠い過去における資料の記録から得られる情報は、自ずとかなりの程度まで限られてしまう。このために、記録に現れないか、失われた風習については、ほとんどか全く知るすべがないのは仕方ないことである。

しかしながら、ある一方の民族において失われたと考えられる風習が、別の民族においては継承されていることがある。それが地域的に新たに生じた風習か、あるいは古くから連綿と続く風習なのかは、必ずしも確証するのは容易ではない。けれども、その風習に密接に関係しえる用語には、その疑問を解く可能性があるかもしれない。

例えば、ロシアの所々において、婚姻儀礼の場で *kvas* 「ライムギを醗酵させた飲物」が何らかの方法で用いられる(Tolstoj (ed.) II 1995, p.488)。他方で、上・下ソルブ語では同じ *kwas* の語義が変化して「酵母、結婚披露宴」を表す。今日のソルブ人社会では、ロシアに見られるような風習は報告されていないようである(Bokarius 1992)。けれども、ただ語義においてのみ、一種の醗酵飲料がかつて婚姻儀礼の中で何らかの方法で関係付けられていたことを知ることができる。そこで、この事実から *kvas* が古いスラヴ文化の婚姻儀礼において利用され、何らかの役割を果たしていたという想定も排除できないであろう。

このロシア語の *kvas* という語については、また別の疑問点が生じる。というのは、ス

ラヴ語以外では、これに対応するラテン語の名詞 *caseus* 「チーズ」が見られることである。

14. *kvas* 「ライムギの醗酵飲料」 (< スラヴ祖語 **kvasъ*)
ラテン語 *caseus* 「チーズ」

この場合、本来の語義をどちらの言語が反映しているのか、必ずしも明確ではない。ただし、ラテン語の *caseus* は音形の特徴から見て、方言からの借用語であるのは明らかであり、古代ローマにおいてある種の外来のチーズが一般的ではなかったことが分かる。何れの場合にも共通している特徴は、醗酵させた飲料または食べ物に対して与えられた名称ということである。したがって、儀礼においてはまさにその醗酵という性質に特別な意味を持たせたのかもしれない。

スラヴ文化において *kvas* が本来は厳密に何を指していたかは、結局のところ分からないままである。かりにその原義が「チーズ」であったとしたら、12~13 世紀のロシアの婚約式においてチーズが供食されていたという報告は、大変興味深い(伊賀上 2013, p.39)。というのは、語用の問題は別にして、それがその本来の風習を反映しているのかもしれないからである。他方で、ロシアの婚姻儀礼における *kvas* の利用は、語義の変化とともに風習が変化した結果と考えることもできる。

いずれにせよ、*kvas* のような日常的な醗酵性の加工製品を表す語が、ラテン語との間で共有されているという事実は、単に同類の飲食物をかつて口にしていたというだけでなく、この場合には婚姻儀礼においても特別な意味を含意して利用されていたという可能性も排除できないであろう。

さらにもう一つ、注目すべき例がある。ニーデルレが指摘したように、スラヴ諸民族全般においては、リンゴを花嫁から花婿に与えるか、または互いに交換するという風習が見られる(Niederle 1911, p.83)。次の通り、ロシア語でこの「リンゴ」を意味する語は、ゲルマン語派とバルト語派、ケルト語派に加え、ラテン語においても地名「リンゴ(村)」にのみ対応する同源語が現れる。

15. *jabloko* 「リンゴ」 (< スラヴ祖語 **ablъko*)
リトアニア語 *obuolas* 「リンゴ」
古期高地ドイツ語 *aphul* 「リンゴ」
古アイルランド語 *aball* 「リンゴ」
ラテン語 *Abella* 地名

他方で、古代ローマにおいてリンゴは愛の象徴を表わすものとして、古典作品中に描か

れている。以下に示すのは、ウェルギリウス(Publius Vergilius Maro B.C.79~19)著『牧歌(Eclogae)』第3歌65節からの引用例(小川訳)である(ウェルギリウス 2004)。なお、ラテン語で「リンゴ」を意味する語は、*malus* に置き換わってしまった。

ダモエタス

「快活な娘ガラテアは、僕に林檎を投げつけて、
柳の林へ逃げていくが、隠れる前に見てほしくてたまらない。」

このように、伝統的なスラヴ社会の婚姻儀礼におけるリンゴの交換と、古代ローマにおいてリンゴに付与される象徴性との間には、儀礼とそれを表わす語彙の両面において起源的なつながりを認めることができるかもしれない。もちろん、この様な類の対応例は、必ずしも婚姻儀礼にのみ関係付けられて説明されるわけではない。けれども、儀礼における平行現象とその語彙表現の一致が共起するという事は、単なる偶然によって説明されるものではなからう。

スラヴ諸族のような同系統の民族間だけでなく、スラヴ系とは異なる民族との間においても、古くから伝わる婚姻儀礼の風習に観察される共通点は、必ずしも地域的に限定された特別な現象とは限らない。仮にそれがインド・ヨーロッパ的な古い風習に起源を遡ると想定されたとしても、語彙表現においても同様に共通する語形が対応するとは限らない。また、しばしば語義は全く変化してしまい、別の語に置き換わってしまうことも決して稀ではない。まさにそのことが原因となって、伝統的な婚姻儀礼における様々な細部の風習や象徴性の意味を曖昧にし、起源を明らかにすることを困難にしているのではなからうか。それゆえに、婚姻儀礼の用語につき、語形の対応する実例が別々の語派の間において現れるのは、とくに注目に値すると言える。

8. 結語

以上で論じたように、検討対象に取り上げたいくつかの語彙例は、とくに婚姻儀礼との関連性に配慮することによって初めて、語義の変化、発達した背景を説明できる場合があった。これは実際に、そういった語彙例が婚姻儀礼の用語として機能していたことの論拠になりえる。だが、ここで検討した語彙例は、婚姻儀礼に関係付けられる用語としてはほんの一部にすぎないと思われる。

スラヴ社会において伝統的に継承されてきた婚姻儀礼の中には、ヨーロッパで一般的な風習だけでなく、とくに古代ローマで行われていた儀礼の風習と並行するような側面が見られた。それと同時に、その儀礼に関係付けられる用語が同源語として、しばしば語義が変化しているとはいえ、スラヴ諸語とラテン語、時にはゲルマン諸語やバルト諸語との間で共有されていることが確かめられた。このような言語的事実に基づくと、スラヴ社会に

おける伝統的な婚姻儀礼が成立した年代は、決して歴史的に新しくなく、相当古くまで遡るといことが推定される。さらに、スラヴ的な儀礼の個々の風習は独自に発達したものばかりでなく、他民族との文化接触を背景として成立した側面もあることを考慮に入れる必要がある。

参考文献

- Bokarius, S. E. (1992) „Svadebnaja obrjadnost' serbolužičan (Istočniki po serbolužickoj etnografii v sobranii MAE“ *Iz kul'turnogo nasledija narodov vostočnoj evropy. Sbornik Muzeja antropologii i etnografii*, XLV. pp. 153-163.
- Ernout, A., Meillet, A. (1979) *Dictionnaire étymologique de la langue latine*. Klincksieck. Paris.
- Glare, P. G. W. (Ed.) (1982) *Oxford Latin Dictionary*. New York. Clarendon Press.
- Gura, A. V. (1977) “Iz severnorusskoj svadebnoj terminologii (xleb i prjaniki slovar)”
Slavjanskoe i balkanskoe jazykoznanie. pp.131-180.
- Kozačenko, A. I. (1957) „K istorii velikorussskogo svadebnogo obrjada“ *Sovetskaja etnografija*, 1. pp.57-71.
- Niederle, L. (1911) *Slovanské starožitnosti. oddíl kulturní. život starých slovanů*. 1. Praha.
- Paoli, U. E. (1963) *Rome Its People Life and Customs*. Longmans. Aberdeen.
- Tolstoj, N. I. (Ed.) (1995) *Slavjanskije drevnosti : etnolingvističeskij slovar'*. 1-3. Meždunarodnye otnošenija. Moskva.
- Treggiari, S. (1988) “Roman marriage” *Civilization of the ancient Mediteraenian Greece and Rome*. vol.3 (Ed. by M.Grant, R.Kitzinger) Charles Scribner's son, N.Y. pp.1343-1354.
- Trubačev, O. N. (1975) „Neskol'ko drevnix latinsko-slavjanskix paralelejev“ *Etimologija* 1973. Nauka. Moskva. pp.3-16.
- Vasmer, M. (1986) *Etimologičeskij slovar' russkogo jazyka*. 1-4. Moskva.
- 伊賀上菜穂 (2013) 『ロシアの結婚儀礼：家族・共同体・国家』 彩流社
- ヴェーバー・カール・ヴィルヘルム (小竹澄栄訳) (2011) 『古代ローマ生活事典』 みすず書房
- ウエルギリウス(小川正廣訳) (2004) 『牧歌・農耕詩』 西洋古典叢書 京都大学学術出版会
- 風間喜代三 (1987) 『ことばの生活誌：インド・ヨーロッパ文化の原像へ』 平凡社選書 平凡社
- シュラーダー・オトー(ハンス・クラエ改訂 風間喜代三訳) (1977) 『インド・ヨーロッパ語族』 クロノス
- 長谷川岳男, 樋脇博敏 (2004) 『古代ローマを知る事典』 東京堂出版

パンヴェニスト・エミール(前田耕作監修；蔵持不三也 [ほか] 共訳)(1986) 『インド・
ヨーロッパ諸制度語彙集：経済・親族・社会』 言叢社
ベーレンツ・オッコー(2001) 『歴史の中の民法 ローマ法との対話』 日本評論社